

大学院を良くする三つの方法

遠藤一佳

生命環境科学研究科助教授

はじめに

地球進化科学は地球のつくりや成り立ちを明らかにする学問だ。アリストテレスに遡る老舗の学問だが、地球のことは実はまだ分かっていないことが多い。地震予知、環境問題、エネルギー問題など私たちの生存に係わる問題や、海洋探査、惑星探査、生命の起源など私たちの認識を根底からくつがえすかもしれない問題に直接関係する分野でもあるが、これらの本格的な研究はまだ始まったばかりだ。今後このような新しい分野を進めていく上で大学院教育が重要であることは他の自然科学分野と同様である。専攻や個人レベルの取り組みも重要だが、大学執行部や文部科学省による舵取りも決定的な影響を及ぼす。本稿では、最近の国による大学院政策に対する私見を述べたい。

大学院学生定員は全国的に減らすべきだ

21世紀は政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域で新しい知識・情報・技術が重要性を増す時代らしい。そのような「知識基盤社会」で国力を増大し、国際競争力を確保するためには大学とりわけ大学院における人材育成が重要だ。中央教育審議会大学分科会大学院部会の「新時代の大学院教育―国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて―」（答申、2005年9月）では、このように大学院を取り巻く社会状況を分析し、今後は教育課程の組織的展開を強化することで大学院教育を実質化すべきだとしている。

ここで重要な伏線となっているのは、1991年に大学審議会答申「大学院の量的整備について」によって打ち出された大学院生倍增計画により、大学院学生の数が大幅に増加したという事実だ（1988年に全国で約8万7千人だったのが2005年には約25万

4千人に増えた：上述答申2005年)。つまり、数は増やしたが品質が伴っていないので何とかせよということだ。しかし、大学院学生数はおよそ3倍に増えたが、大学教師数はわずかしかな増えていない(1990年と2004年の大学の教員数はそれぞれ約12万4千人と約15万9千人：文部科学省「学校基本調査報告書」)。もちろんこの間に大学の学部定員も増えている。これでは教育の質が低下するのは当然ではないか。したがって、少なくとも自然科学分野においては、「実質化」より前に大学院生を全国的に減らすこと、もしくは大学院の教師を増やすことが現在とるべき政策のはずだ。

私の所属する地球進化科学専攻では現在五年一貫制から区分制への移行を計画しているが、修士課程新設による定員増が思わぬネックとなっている。これまで大学院重点化の過程で全国の大学が受け入れてきた教員数・予算と大学院定員との比率には無理があったとしか思えない。法人化により大学院定員の決定は各大学の裁量にまかされることになったと思うが、大学当局の方々にはぜひとも文部科学省ではなく現場の立場に立って適切な定員を判断していただきたい。

文部科学省は博士号取得者を率先して採用すべきだ

学生定員増による教育の質の低下は「大学院重点化」などでウェブ検索をすればある程度実体の把握ができよう。だが幸いにも最終的に地球進化科学分野で授与される博士号の価値は低下していないように思う。入口は場合によっては多少ゆるめられはしても、出口はこれまで通りの高いレベルが教員の良識によって維持されているためだ。しかし「新時代の大学院教育」答申の「円滑な博士の学位授与の促進」の項などを読むと暗澹たる思いがする。大学は先生に教えてもらうところではなく自分で学ぶところのはずだ。大学院ならなおさらである。自分で学ぶことを学ばせるために心ある大学教員は気を配る。ルーチン化された教育で濫造された学位を博士号と呼ぶべきではないだろう。

一方、定員の増加によってもう一つの大きな問題が引き起こされた。がんばって博士号を取得しても就職できないという問題である。学生定員は増えたが大学の教員ポストが増えていないのだから当然だ。これに対して政府は「ポスドク等1万人支援計画」などにより博士号を取得した若手研究者をサポートしてきた。2005年度のポスドクの人数は約1万3千人とのことだ(文部科学省科学技術・学術政策局「大学・公的研

究機関等におけるポストドクター等の雇用状況調査」2005年)。しかしいくらポストドクを支援しても、大学や研究機関のポストが増えない限り、これらの博士号取得者の大部分はいつまでも生活が不安定なポストのままだ。

そこで「新時代の大学院教育」答申は、大学院修了者の進路が多様化することの重要性を強調し、「大学と産業界等との連携を強化するとともに、学生はもとより、大学、産業界等の各主体が、博士課程修了者は大学の研究者になることが当然という意識を改める必要がある」としている。このこと自体は正しい。研究だけが人生ではないし、博士課程修了者全員が大学の研究者になることは現実には不可能なのだ。また、大学院で学ぶのは専門知識だけでない。問題を見つけ、解決し、結果を人に伝える方法を学ぶ。博士号取得者は使いようによってはとても役に立つはずだ。博士号取得者は実社会ではつぶしがきかないというのは、多くは年功序列や異分子を嫌う社会構造に根ざした偏見ではないだろうか。

これに同調するかのように「新時代の大学院教育」答申は以下のように述べている。「博士の学位の取得者等について、年齢等にかかわらず、課題探求能力等の実力を適正に評価して人材の登用を行うなど、今後の知識基盤社会における国際的な競争に

耐えられる職務体制・人材の配置などの知的経営に向けた構造的改革への努力が求められ、企業側のこのような意欲的な取組を評価し、顕彰することも有効であると考えられる」。また、答申のこの項目「大学院修了者の進路の多様化」の最初には「(博士号取得者は)産学官連携を実践する鍵(かぎ)としての役割も期待されるが、例えば、米国と比べて民間企業への就職は少ない状況にある」などと書かれている。

しかし、私はここでハタと考え込んでしまった。確かに博士号取得者の民間企業への就職は米国と比べて少ない状況にあるのだが、それを言うなら博士号取得者の政府機関への就職も米国と比べて著しく少ないのだ(文部科学省科学技術政策研究所「博士号取得者の就業構造に関する日米比較の試み」2003年)。米国では科学・工学の博士号取得者総数57万4900人の約1.7%にあたる9500人がこれまでに連邦政府の行政官などとして政府機関に職を得ている。日本の官僚で理学博士、工学博士は果たして何人いるのだろうか。

こうして見ると、三つ前のパラグラフで引用した「大学と産業界等との連携を強化するとともに」で始まる文章のあざとさが際立ってくる。産学連携に官も加わるが、博士課程修了者について意識を改める必要があるのは主に大学と産業界だということ

だろう。冗談を言ってはいけない。まず隋より始めよと言うではないか。文部科学省はキャリア官僚として博士号取得者を率先して採用すべきである。面倒なこと大変なことを率先して行うのが真のエリートだ。

大切なのはアイディアをつぶさないこと

大学院教育を充実すべきだということに異論はない。しかし、大学院の学生数を増やし、組織的教育を施すことは質の向上の必要条件ではない。学生数を増やせば何とかなるというのは競争原理を導入して科学技術を発展させようという発想と同根であろう。確かにある程度の緊張感はあった方がいい。だが、私たちは何億もの卵を産むマンボウとは違う。つぶしがきかない状況下での争いはあまりに過酷だ。為政者は大学院生や若手研究者の人生を一体何だと思っているのだろうか。組織的教育も米国の制度の信奉者にとっては必要条件に映るかもしれないが、それが通用するのも修士レベルまでだ。前提を再確認するのが教育だとすれば、前提を疑うのが研究だからだ。米国と並んで科学技術のレベルが高い国として英国（連合王国）があげられる。英国の大学院博士課程ではコースワークなどの「実質的」教育は行われていない。

大学院の質を高めようとするなら、大学教員の質を高める必要がある。そのために

は給料を上げるのが一番だろう。私たちはバブル期に優秀な学生がこぞって金融機関に就職してしまったことを知っている。国立大学が法人化された今、いずれ教員の給料を他より高くする大学が出てくるだろうと私は予想している。そしてそのような大学が長期的には「いい大学」として生き残るだろうということも。

もちろん私たちは金儲けのために大学で働いているのではない。それは私が大学院時代を過ごしたスコットランドでも同様だ。英国の大学教員も総じてつましやかな生活をしている。では彼我の差はどこから来るのだろうか。

それはいいアイディアをつぶさない、というごく単純なことなのではないかと思う。スコットランドの大学院に行ってみずうれしかったのは自分が大人扱いされているということだった。学生が言うことでも正しいことは正しいこととして認める、そのような思えば当たり前のことがとても新鮮に感じられた。それは理屈の通じる社会であり、若い人が活躍できる社会でもある。

また「研究を始める前によく考える。そしていいテーマを見つけたら誰が何と言おうとやりぬく。これがイギリス科学の真髄だ」というW教授の言葉も忘れることができない。もちろんこれはイギリス科学に限

定されるものではないだろう。

昨今ゆとり教育による学力低下がとりざたされている。良かれ悪しかれゆとり教育の効果が現われ始めているということだ。クイズに強い、多くの知識を持っているという尺度ではマイナスかもしれない。けれども、ひょっとするとこれまでにないアイディアを出す人が現れるのではないか。そうだとしたら、そのようなアイディアをつぶさないようにしなければならないな、と私はひそかに思うのである。

(えんどう かずよし／古生物学)